The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「教職教育学」と「教職の専門性」: グループ活動報告「宿題に取り組む教師たち」を事例として
Author(s)	山崎, 洋子
Citation	大阪大学教育学年報. 2006, 11, p. 179-194
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12508
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「教職教育学」と「教職の専門性」
－グループ活動報告「宿題に取り組む教師たち」を事例として－

山　﨑　洋　子

【要旨】

本稿の目的は，大阪大学・大学教育実践センターの開講科目「教職教育学」の授業を取り上げ，その授業の課題である「教職の専門性」にアプローチすることを通じて，教職アイデンティティの獲得に向かった受講生たちの事例を紹介することである。従前より授業者である筆者は，本授業を理論編と活動編に分け，前者では教職についての歴史的・現代的知識を伝え，後者では，異年齢かつ異コース編成のグループを介した探究活動を取り入れ，「主体的に多様な観点をもって教職の専門性を考究する」ことをめざしてきた。本稿で取り上げる「宿題に取り組む教師たち」は，201人の小学生と6人の担任教師への宿題意識調査に基づいたグループ活動報告であり，それは通常の授業を超えた活動形態と体験内容をもっていたため，リアリティある気づきを得た事例として着目し得る。本稿の結論として，教職アイデンティティを得るためには，①自らの経験則に方向づけられながらも，それを超えて客観的に教育事象に接近する方法態度を獲得することが要となり，その過程で，②学びにおける協同性の意味がリアリティをもって体得され，具体的なコミュニケーション能力を得ることが不可欠になり，そして，これらの経験を保障するためには，③授業環境の整備，教職カリキュラム全体の構造化を再検討する必要がある，という考察が得られた。

1. はじめに－「教職教育学」とその授業構成－

学問領域とそのディシプリンの不明確さの問題を抱えつつ，「教職教育学」の授業は，それまで提供されていた「教育原論」の授業を廃止し，教育人間学のペア授業として出発した[1]。それゆえ，本稿で取り上げる教職教育学の学的独自性は未だ不明確である，といわねばならない。しかし，たとえそうであるにせよ，その授業では，「教職のため」の，あるいは「教職について」の理論と実践を取り上げ，その双方の意味内容を教職の観点から探究することが求められている。なぜなら，教員養成の緊要の課題は，ひとえに「教育すること」の難しさ，「教師に成る」ことの難しさの出現に由来しているからであり，それは教職意識の問題に還元されるからである。それゆえ，本授業では，具体的レヴェルで「教職について」考究し，「教師になる」という教職アイデンティティの獲得のための「気づきを促すこと」を課している。そこで授業者である筆者は，その授業を概ね2つに区分し，前半を教職の歴史，現状，課題について講義し，後半を課題追求型のグループ活動に当ててきた[2]。

具体的には，「教師とはどのような存在なのか，また，それ以前に教育とはどのようなことなのか，さらに学校とは・・・といった問いが浮上する現代の学校教育において，改めて教職（教育職）について現代的課題を踏まえつつ考察する」という講義目的を掲げ，その内容を次の4点に，すなわち，「①近代国家と教員免許，②外国の教員免許，③教職と教員の専門性，④これからの教員に求められることについて考える」という4点に絞り，最後の④をグループ活動とその成果発表に当てた（講義初回配布レジュメ参照）。つまり，受講生は，授業の後半において，各グループ別に議論してテーマを設定し，調査し，そして，最終的に教師論へと意見を集約して発表することになる。④の活動は実際には5月末ごろから始まるため，グループ内での討議では授業時間以外の時間をも別途費やさざるを得ず，その過程において必然的に課題に主体的に向き合う態度が形成されてくる。つまり，受動的に専門知識を教授され記憶するというスタイルを超えて，授業の前半で得た知識を活用しながら，教職について考究することが必然的に要求されるのである。また，この授業では，学習意欲に燃えた入学直後の時期に，自らの教育歴を振り返りつつこれまでの学校生活を対象化することも求められ，またさらに，教職を希望する年長学年の受講生（2，3，4年次生及び院生）にとっては，この活動は将来設計を左右する重要な体験となり，その意味で，受講生は極めて意味ある時間を過ごすことになる。

本稿では，まず初めにグループ活動の全体像とそこ活動のなかでどのような研究テーマが出てきたかを示し，次にグループ活動の一つ，すなわち2005年度「教職教育学」受講生第15班（5名，グループ名称：夏の風物詩。以下,「夏の風物詩G」と表記する）のグループ活動「宿題に取り組む教師たち」を取り上げ，彼らの実施した調査結果の分析・考察を紹介し，そのことを通して受講生が教職についてどのような課題を見つけ，教職の意味に気づいていったかを明らかにする。夏の風物詩Gを取り上げる理由は，従前のほとんどのグループ活動が，学内での調査アンケートやインタビュー調査，資料レビューに留まっていたのに比べて，同グループは時間的に大きな制約があるにもかかわらず，学校現場に目を向け，極めて実証的に対象に迫ろうとした点にある。なお，同グループは，ここで取り上げる調査と比較する観点を得るため，大阪府内T市公立小学校の男性新任教師（23歳）にもインタビューしているが，本稿ではその点への論及は割愛する。

2. グループ活動の全体像と夏の風物詩Gの調査活動

(1) グループ活動の全体像－協調性とコミュニケーション－

グループ活動の前提となるメンバー構成は，その活動を左右する重要なファクターであるが，グループ編成は，これまでの授業では受講生に全て一任してきた。だが，2005年度は，議事進行係2名の下，約20分の議論の後，学科専攻をバラバラに解体する形でグループが編成された。また，授業時間内でグループ活動の時間として取れるのは，実質的には4回であるため，授業時間外のグループ活動が必要になる。また，それに加えて，個別の細かな助言指導も必要になる。近年採用されているオフィスアワーのような形式ではそれは対応不可能であり，授業日であるか否かにかかわらず授業者には臨機応変な対応が求められる。また、こうした通常の講義スタイルを超えた非形式的な助言指導こそが，実は，実質的なコミュニケーション能力を育て，日常レヴェルで教育の課題や教師の専門性について考える機会をもたらす。なぜなら，調査研究の経験が皆無に近い受講生にとって，他者の協力連携を必須とする行為においては，言語表現，発言タイミングなどの態度決定を不可避とするコミュニケーション能力が，他者との関係のなかで，随時，要求されるからであり，また，こうした日常的実践がスムーズになされてはじめて教師の教育行為が豊かなものになっていく，と考えられるからである。

受講生への終講時アンケートからは，この参加型授業スタイルに対する評価は極めて高く，初期受講登録者106人中の88人が最後まで受講し続け，このスタイルを肯定的に評価している。例えば，「グループで教育課題を見つけ,探究するなんて,自分たちにできるはずがない」,「先生は何を期待しているのか」(文,人文1A)（(　) 内は受講生の所属を、数字は学年を示す。）という初期の怒りにも似た気持ちが，グループ活動をすすめる中で「僕らがやるから意味がある」(文,人文1A),「教師の仕事の特徴は無境界性にある」(文,人文1K),「夜遅くまでの授業,知らない人とのグループ活動など,当初は大変で正直嫌」であった者が,「その分だけやりがいがあって，終わったときは達成感がありました。・・・教職の授業は取り続けようと思った」(文，人文1S)，「正直，負担は大きかったと思う。でもその分，教職，特に教師がどうあるべきかについて調べたことによって，より理解が深まった。・・・，自分自身の考えを構築する機会でもあったのでよかった。さらに，他のグループの発表も聞き取れたし，自ら調査する中で付随的な知識をえることができたので良かった」(人間科学部人間科学科1K) などと，最後まで受講した者全員が肯定的意見を述べている。ここには受講生間の協調性が存在するということができよう。ただし，時間的、物理的な問題は,残されたままである。例えば,「グループ発表後にもっと意見交換したかった。先生のコメントももっと聞きたかった」(理，地球，10) といったコメントもあり，このような授業を後期に継続させることができれば，より思索は深化するのではないか，と推察することができるからである。

また，今年度の授業ではアンケートを実施するグループが3つあり，それらに対しては，事前協力依頼，公的な依頼文書作成，言語表現に配慮したアンケート用紙作成という一連の実際的な作業が必要になる。それゆえ，活動すること自体が，机上の理論を超えた社会的責任を伴うことになる。したがって，そうした一連の行為への詳細な助言指導なしには，グループ活動は遂行し得ない，ということをふまえておかねばならない。その方法は，近年では，主に電子メールを用いたものになるが，それに加えて，責任開設講

座の博士課程に在籍しているTAによるサポートが大きな役割をもつ。

このようにして実施されたグループ活動のテーマは，1班より15班まで順次列挙すると，「学校と家庭と子どもの関わり」，「理想と現実」，「フィンランドを調べて」，「外国の教育制度との比較」，「好かれる教師とは」，「あなたは校則が好きですか？」，「生徒のやる気を引き出すには？」，「特殊免許状制度について」，「昔と今，そして未来」，「教師の役割－今と昔」，「『生徒が求める教師』とは？」，「義務教育の問題と改善策」，「学校と地域社会」，「教師の立場，役割，あり方」，「宿題に取り組む教師たち」となっている。一瞥してわかるように，極めて具体的なものから歴史を遡ったものや理想像を考究したものまで，幅広くテーマが選ばれていることがわかる。とりわけ，印象深かったのは，また，好印象を与えたのは，教職イメージがいかに形成されたかに言及した歴史的考察である。このことは、受講生が教職のルーツや社会的背景、教職のルーツや社会的関連性に関心を持ち始めたことを示している。さらにまた，発表順序は受講生自身の話し合いにより希望に応じるかたちで決められ，発表に対しては，授業者の主導性によって，テーマ設定，論考内容，発表の工夫，伝達力，総合の観点から自己評価と他者評価を取り入れることとし，全員がコメントを記載する方法をとった。今年度のグループ活動の特徴は，発表の点でも内容の点でも，例年になく精緻に議論が練られ，発表方法も高度に洗練された媒体や現実的なスタイルが取り入れられていた，ということである。おそらく，これは本授業について先輩学生からある程度の情報を入手して受講している者が多いことが影響している，と考えられる。

(2) 夏の風物詩Gの活動内容－方法態度としてのコミュニケーション能力－

では，夏の風物詩Gは具体的にどのような活動をしたのであろうか。なぜ，宿題をターゲットにしたのだろうか。また，それに際して彼らはいかなるコミュニケーションを必要としたのであろうか。様々な疑問が出てくるが，重要なのは，こうした課題に向き合おうと決意した点それ自体である。なぜなら，アンケート実施と回収までには，概括的に，調査校の選択と事前依頼，アンケート案作成・点検，アンケート完成，アンケート用紙印刷，アンケート実施の正式依頼，アンケート用紙送付，アンケート実施，回収依頼，実施アンケート受領といった多様で煩雑な一連の作業が，その分析に至る以前に必要となるからであり，大学外に目を向けた行為自体が，まさに実践的であるからである。

まず，挙げるべきは，日常レヴェルのコミュニケーション能力とアンケート作成能力の双方が要求された点である。とりわけ前者は，高等学校卒業後すぐにアカデミズムの世界に参入した者に欠如しがちな実際的能力である。それゆえ，結果的に，TAの後半の仕事は，授業者の指導助言が的確に実際的行為に反映されるように，受講生の間のやり取りをスムーズにサポートすることに費やされた。一般的に，学校へのアンケート調査は，その依頼先の学校には何の利益ももたらさないため，依頼先には敬遠されがちであり，また，こちらのスケジュールに合わせた結果が返ってくるように依頼するということは，多大な負担を相手校に強いることになる。とりわけ，限られた授業期間内に依頼するわけであるから，相手校には想像を絶する負担が課されることになる。それゆえ，当初，この計画は不可能に近いと思わざるを得ない状況であった。しかし，これが教育養成に寄与し得るという信念が相手校の校長や教員にあったこと，それだけでなくアンケート実施に際しての信頼関係があったことが功を奏し，実現したのである。

これらを踏まえて，調整依頼したのは，昨年度の「ソニー教育科学プログラム」において，最高賞の「入選プロジェクト校」に選ばれた愛知県の岡崎市立上地小学校である[3]。本年度の4月当初，同校は11月4日の「第4回　ソニー科学教育研究会　全国大会」に向けて研究を進めていた。つまり，同校は教育実践の先進校ということができる小学校であった。夏の風物詩Gは，熟練教師と新人教師の宿題への対応の相違点を明らかにしたいとの調査初期の希望に従い，依頼した学校長の配慮を得て，各学年主任が担当しているクラス，すなわち，6クラスの児童全員とそれぞれの担任教師を対象にアンケートを実施した。作成されたアンケートは，表2，表3のような内容のものである。このアンケートの作成に際しては，実際に3回の助言添削指導を実施したが，概ね，それは用語選択上の問題と児童，教師への配慮に関する程度のものであった。このグループの受講生は，学部の1年生3名，2年生1名，4年生1名の5名で構成されており，いずれも教育学関係の授業を受けるのは初めてであった。つまり，自らの受けた教育体験は根底に

あるが，その対象化に際して必要な理論的・教育学的知見を持ち合わせていないという状況下にあったのである。

さて，苦慮の末，アンケートを作成し，TAの協力を得て印刷し送付したわけであるが，実際にそれらが返送されてくるまでに数回の依頼電話が必要になり，調整結果が手元に届くまでには約3週間を要した。とはいえ結果として，そこには方法態度としてのコミュニケーション能力を得る道筋があった。

こうして多くの労力を得て入手したデータに対して受講生は，どのような観点から分析データを選別し，それらに考察を加えたのであろうか。そこでは，実は，アンケート入手及びデータ入手からプレゼンテーションまでに，約4日間しかないという状況があり，かなりのスピードが要求されることとなった。

3. 夏の風物詩G「宿題に向き合う教師」－学校現場への調査とその考察－

夏の風物詩G代表者の報告によれば，アンケート対象者及び回収者は，1年生33名，2年生31名，3年生33名，4年生33名，5年生33名，6年生38名，合計201名であった。次の（表1）は，夏の風物詩Gの最終プレゼンテーションの内容であり，(表2)と(表3)はアンケートと共にその結果(結果の部分的抜粋)を示したものである。既定の時間（20分間）で発表された＜発表内容＞を見れば，一見，何気なく出される宿題が教師の細かな配慮によるものであることが，つまり臨機応変なタクトに満ちたものであることが受講生に理解されている，ということがわかる。当然のことながら，この気づきは，教育の受け手から教育の与え手へと転換する意識を促すためには重要なものになる。

＜発表内容＞

（表1）

1．導入

私たちは、大阪大学の教職課程の一環である「教職教育学」で「宿題」をテーマに研究しました。なぜなら「宿題」というものが教育という場において重要な役割を担うと考えたからです。これまで学校で出される一方であった我々にとっては、宿題に対してあまり良い印象はありませんでした。しかし、その様々な宿題の中には楽しかったと今でも覚えている宿題或いは自分のためになったと思う宿題もあります。このように宿題を振り返ると、その内容や量などは多分に先生方の個性や様々な意図、願いがこめられているように思えます。また、アンケートを通して宿題を出す側と出される側、つまり、教師と児童の考えと現状を探ることで、宿題というものに対する理想を考えてみました。

2．児童に対するアンケート結果とそれに基づく分析・考察

Ⅰ．アンケート結果（表2・表3参照）

Ⅱ．アンケート分析

＜児童に対するアンケート分析＞

①「必ずやる」・「ほとんどやる」を足したものを達成率とみなすと、各学年とも80%以上、特に一年生は100%と高い達成率であるといえる。

②全体的には「自分のためになるから」と答えた児童が最も多い。また学年間の相関関係も見られる。例えば、「宿題をするのが好きだから」といった能動的な理由は低学年を中心に多く、逆に「やるのが当たり前」といった受動的な理由は高学年を中心に多い。

③「嬉しい、次も頑張ろうと思う」という回答は低学年に多く、高学年になるにつれて「なんとも思わない」の割合が増えていく。

④「はい」・「ときどき」の割合を足した割合が全学年80%～100%である。しかし、児童の中には「宿題を出してないから、チェックされていない」という回答もあった。

⑤回答数が少なく、あまり正確とはいえないが「宿題があったことを忘れてしまうから」・「難しくて多くてできない」が主な理由であると思われる。

⑥「多いけどやろうと思ったらできる」・「ちょうどいい」を足した割合が全学年60%～90%である。

傾向としては、低学年には「少ない」という回答が、高学年には「多い」という回答が若干多い。

⑦「まあまあ難しいが、最後までできる」・「普通ちょうどいい」を足した割合が全学年70%～80%である。「簡単で、あまり苦労しない」・「簡単すぎて、物足りない」は一年生・二年生が特に多い。

⑧「一人で」という回答が全学年通して最も高い回答率である。次に「家族と一緒に」の割合が高い。

＜教師に対するアンケート分析＞

①児童の本音と、教師の意図を比較してそう大差はなかった。これは、教師が児童のことをよく理解し、児童に合った宿題を適切に出しているためであると思われる。

②しかし、少数派の意見に注目すると、やはり児童の本音と教師の意図がずれているのは否めない。この少数派をどうすべきなのかは大きな問題の一つであろう。

Ⅲ．考察

まず、各学年の宿題提出率を見てみると、かなり提出率が良いことがわかります。グラフ②は、グラフ①で「必ずやる」・「ほとんどやる」を回答した児童に、その動機を尋ねた結果です。これと合わせてグラフ③の回答を見合わせてみると、低学年には「宿題をやるのがすき」・「宿題をやると褒められる」・「嬉しい、次も頑張ろうと思う」といったように自分がやったことへの充足感や次回へのやる気を他人によって喚起されている傾向がみられます。このことからも、宿題をやらせっぱなしにするのではなく、きちんとレスポンスを見せてあげることが、特に低学年の宿題に対するモチベーションづけには有効なのではないでしょうか。実際に先生方、特に低学年の先生方は児童たちのやってきた宿題に対するチェックをまめに行っていることが本人たちのアンケート回答からも窺える上、児童たちの評価からも見て取れます。また、「自分のためになる」と答えた児童は、家庭からなどの「大人」の影響が強く出ているものと思われます。これに対して「やらないと怒られるから」というネガティブな理由を挙げている児童が学年によって異なることに注目し、各学年の先生方の宿題チェックの頻度や厳しさ、やってこなかった児童に対する指導内容と合わせて検討してみました。すると、やはりペナルティなどで厳しく宿題提出を取り締まる先生のクラスでは、提出率そのものも高い反面、ネガティブな理由を挙げている児童の割合も高いことがわかります。すなわち、「鞭を振るう」やり方での宿題の促しは、非常に成果は出るものの、自主的な意欲は減ってしまうということに繋がるようです．

では次に、日ごろ出される宿題の量と難易度について考察してみました。先生方はみな一様に、量・難易度ともに児童にとって適度であるとしています。一方、児童も「(多少のやりごたえや物足りなさはあるにしても）ちょうどいい」と答えています。しかし、少数派の意見に注目すると、傾向として、低学年は「少なくて、簡単」と感じている児童が、高学年は「多くて、難しい」と感じている児童が、いることも見逃せません。これは宿題に限らず、様々な能力をもつ児童たちの中でどこに焦点をあてていくか、すなわちどんな目標をたてるか、どのようにして一人一人の児童に接していくかという教師の大きな問題と直結していると言えます。

（夏の風物詩Ｇ作成）

4.「宿題アンケート」からの「気づき」－「教職の専門性」への接近－

では，これらの活動からどのような気づきの状態が生起している，といえるであろうか。宿題調査に対する結果及び考察を見る限り，彼らの気づきは極めてシンプルである。ただ，上地小学校から得た膨大なデータの集計分析，プレゼンテーションへの集約が困難な作業であることは，想像に難くない。なぜなら，このグループのメンバーは「集計作業に要したのは約20時間であった」（終講時アンケート）と報告しており，またこの時期は他の受講科目の試験と重なる時期だからである。さらにまたこのグループは，新人教師へのインタビュー（2時間）も実施したため，積極的的な受講生らであることは，言を俟たない。終講時アンケートの質問項目の一つ「グループ活動に際して授業以外に使った研究自習時間」に対しては，同メンバーの回答は，「全12時間」から「全20時間」の間に分布している。それゆえ，協同性を伴った主体的な学習スタイルが，この入学初期に否応なく課さたということである。このことの意味は大きい。なぜなら，受動的で暗記に偏ったそれまでの学習スタイルを転換するのは，この時期が最も適切だと考え

られるからであり，また，傍観視したりエスケープすることが許されない状況が，現前に存在すること自体が教師を目指す者には重要だからである。

さらに興味深いことに，ここで紡がれた言葉が，そこに至るリアリティある活動プロセスからのものであったことは，終講後の課題レポートからもわかる。例えば，「自分の知らなかった世界を，初めて会った人たちと一緒に探っていくのは，とても面白い経験でした」（文，人文，20），「グループ活動は確かに大変でしたが，その分得るものも大きく，大変有意義だった」（基礎工，応用化学，1S），「積極的に取り組めたので，教育，特に教師の問題について理解を深めることができた」（経済，経，1T），「教職を目指す者同士で議論することにより，自分の中で新たな考え方，見方を得ることができ，非常に有意義であった」（理学，物理，1M）といった，肯定的なコメントがそのことを示している。一方，これらの活動が，負担度の高い授業であったことは，「班員の間で時間的都合がなかなか合わず，苦労した」（同），「時期的に，研究室との兼ね合いの中，時間の捻出を余儀なくされるのは正直かなりハードで負担が大きかったです」（文，美学，4K）というコメントに示されている。この点については，昨年度の授業とは異なった事情であったため，授業者の年長学年への配慮不足と言わざるを得ない。というのも，昨年度は，博士課程・修士課程の受講者グループ（7名）と3・4年生グループ（6名）は別分けにすることができたからであり，このことによって協同性を過剰に強いることなく，年長者も彼らの知恵を「喜々として出し切った」（昨年度受講生レポート）からである。 （下線引用者）

では，「宿題アンケート」によって教師の専門性への接近はどの程度なされたのであろうか。最終の課題レポート（教師の専門性とグループ活動について）から，それにかかわる内容を抜粋してみたい。

「・・・ベテラン教師たちは，『宿題』というものに，単なる学習内容の補足以上の意味付けをし，それを生徒に実感してもらうための様々な努力をされている，・・・また生徒は，そういった教師の努力や現状にかなりストレートに反応していたこともわかる。教師の宿題チェックが甘いと，それは提出の減退に直結しているし，宿題に対してポジティブなイメージを自然と植え付けられてきた生徒はやはり高学年でもだれずにまじめに取り組んで，家庭での学習習慣をきっちり会得できている。・・・生徒はやはり教師の鏡なのだ。教師の努力，工夫，あるいは妥協は，そのまま生徒に受け取られ，生徒もそれに応じたレスポンスを見せる・・・こういった慎重な『生徒観察』から，理想の教師像の模索は始まるのではないか」（文，美学，4K）。

「自分の中で理想の教師像は『状況を冷静に分析でき，臨機応変に対応できる教師』だった。・・・しかし，アンケートを集計していて，・・・先生方は生徒に対して適当な難しさで適当な量の宿題を出しているという結果だったが，生徒からしてみればそれは多く難しいという意見・・それに気づいたとき，教師が『状況を冷静に分析でき，臨機応変に対応できた』として，果たしてそれは『生徒のため』になっているか・・・，もしかしてそれは独りよりではないか・・・」。「・・・宿題の最終的な目標は『制御』であると思う。制御と聞くと機械的な印象を受けるが，制御というものは『正しい方向に導く』といった意味である」（理学，物理，1M）。

「日本の教育問題を考えると・・・教師の仕事全体としての専門性をより重視すべきだろう。ただ，『問題にぶつかった時には子どもに対する愛情で乗り切れ』という精神論，個人の動きだけに全てを任せることには，・・・限界がある。・・・教師の資格を得る際の仕組みによってその専門性を与えるべきだと考えられる」（文，人文，20）。

「教師という職業はある意味失敗は許されないし，現役新人教師のインタビューからもその大変さやしんどさがひしひしと感じ取れた。・・・教師という職業で得られる達成感はほかの職業では得られないものである・・・」。「宿題というものは与えられるものであり，受身的なものだと考えていた。しかし，調べていくうちに宿題の中でも自分から積極的に取り組む宿題と受動的な宿題があることに気づいた。・・・学年があがるにつれて自分から宿題に取り組む姿勢が出てくるというのは，私たちのアンケー

トの結果から読み取れることである」（経済，経，1T)。

「・・・僕が思うに，学ぶこととは非常に楽しくかつ能動的なものでなければなりません。・・・何よりも学ぶことの楽しさに気づかせてあげられるか，ということにかかっている。・・・専門性を持った教師は，僕が思うに，やはり道徳的にも優れているはずなのです。現職の新人教師の方へのインタビューで・・・印象に残っている言葉があります。『僕は周りの先生に助けてもらってなかったら今頃，本当にやばかったです』。・・・教師というものはチームで頑張らなければならないんだと思いました」（基礎工，応用化学，1Ｓ)。（下線引用者）

明らかに，受講生の課題意識が広くなり，「宿題の意味」から「教師の専門職化の制度」，「教職の価値」にまで及んでいることがわかる。それは深い思索ではなく些細な気づき程度のものであるが，重要なのは，こうした体験に裏づけられた「気づきの集積」が深い思索を呼び起こす，と推察されることの意義である。

5.「教職の専門性」へのさらなる課題－まとめに代えて－

ところで，本授業は1セメスターの金曜日6限に設定されているが，実際には，内容的にも時間的にも，通年の授業に相当するものであると見ることができる。このことは，紙幅の都合上取り上げられなかった，他のグループの活動内容のレヴェルの高さと密度の濃さに如実に示されている。また，受講生は，過重な負担を余儀なくされたにもかかわらず，活動的な授業形態に極めて高い満足度を示している。ただ，5月末登録受講生106人の内，最終レポート及びアンケート提出に至った者が88名であったことをいかに解釈するかは難しいが，しかし，本授業の目的及び教職科目の特性を考慮に入れるならば，教職アイデンティティをいかに初期段階に自覚させるかが極めて重要である。それゆえ，たとえ当初はあいまいな気持ちで受講希望していたとしても，最終的には教職への自覚を，つまり「学び手」から「教え手」へと踏み出す自覚と「教職の使命」に気づくことが本授業の要となる，ということを確認しておきたい。

ただ，その際に重要になるのは，このような授業を実施するための環境整備であり，課題は多々残されている。また，物理的な理由で，グループ発表後の相互の分析と考察を共有する余裕がなかった点は，大局的には，教員養成カリキュラムそのものをいかなる独自性をもって編成するかという課題として提起される。人間を対象にした教師という職業に踏み出すための準備は，1年間を通して，理論，実践，理論といった，まさに往還のカリキュラム編成原理の中で実現される必要があり，それをいかに具現化するかが，教員養成カリキュラムの課題として残されている，といえよう。

児童へのアンケート及び抜粋結果

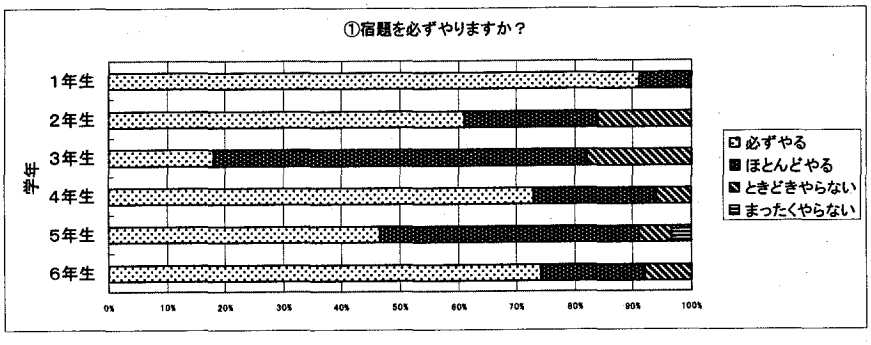
（表 2）

宿題についてのアンケート

このアンケートは、みなさんの宿題に対する気持ちをありのままに理解しようとするものですので、お名前を書かずに、きらくな気持ちでお答えください。

① あなたは、学校で出された宿題は必ずやっていますか？番号に○をつけてください）

1．必ずやる。　2．ほとんどやる。　3．ときどきやらない。　4．まったくやらない。



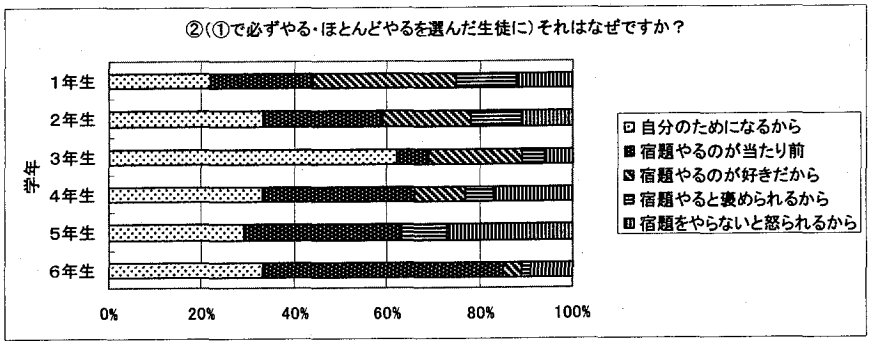
②（1～2に○をつけた人だけ答えてください）それはなぜですか？

1．自分のためになるから。　2．宿題やるのが当たり前だから。　3．宿題をやるのが好きだから。

4．宿題をやると誉められるから。　5．宿題をやらないと、家族やに怒られるから。

6．その他の理由で。（その理由を下のカッコに書いてください）

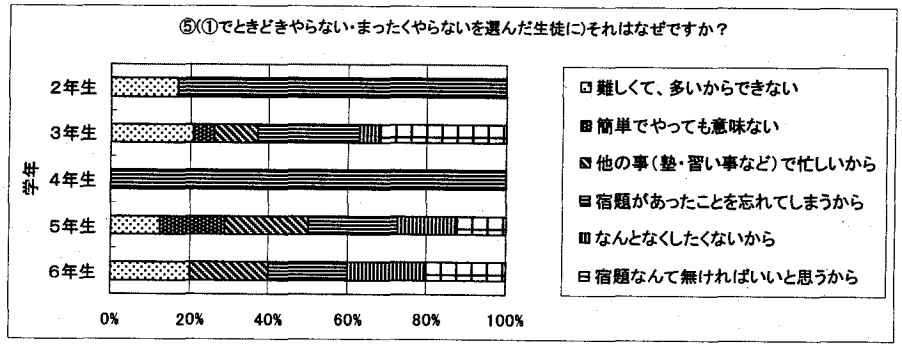
（　　）



③（3～5に○をつけた人だけ答えてください。） それはなぜですか？

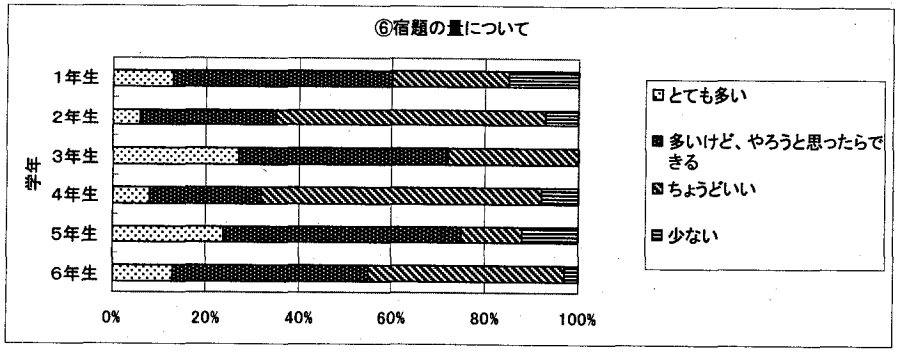
1．宿題が多く難しくて、できないから。　2．簡単すぎてやっても意味がないと思うから。
3．他のこと塾、習い事など）で忙しいから。　4．つい宿題があったことを忘れてしまうから。
5．なんとなくしたくないから。　6．宿題なんてなければいいと思うから。
7．その他の理由で。（その理由を下のカッコに書いてください。）

（　　）



④ 宿題の量について教えてください。

1．とても多くて、全部はできない。　2．まあまあ多いが、やろうと思ったらできる量だ。
3．普通、ちょうどいい。　4．少ない。

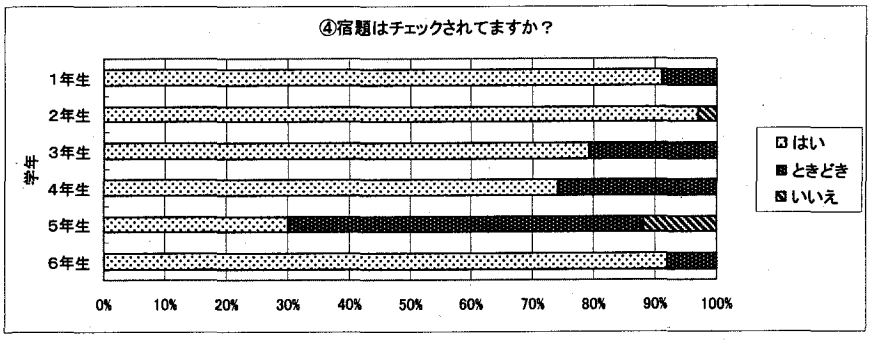


⑤ 宿題の内容（難しさ）について教えてください。

1．とても難しくて、わからないことがあって大変だ。2．まあまあ難しいが、最後までできる。
3．普通、ちょうどいい。　4．簡単で、あまり苦労しない。　5．簡単すぎて、もの足りない。

⑥ 宿題はちゃんと学校でチェックされますか？

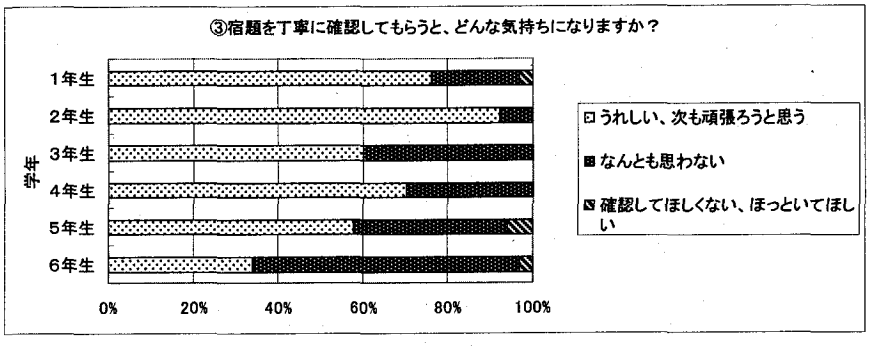
1．はい　　2．ときどき。　　3．いいえ



⑦ 宿題をていねいに確認してもらうと、どんな気持ちになりますか？

1．うれしいので、次もがんばろうという気持ちになる。　2．なんとも思わない。

3．いちいち確認なんかしてほしくない。ほっておいてほしい。



⑧ これまでで一番楽しかった宿題、やりがいのあった宿題、好きな宿題があれば教えてください。

＜記述内容の結果＞

＜1年生＞・プリント　・音読　・足し算　・引き算　・ポケモンの宿題　・遠足
＜2年生＞・漢字　・計算プリント　・作文　・早く寝る宿題
＜3年生＞・蝶のたまご探し　・算数プリント
＜4年生＞・漢字ドリル　・算数プリント　・係決め　・早寝早起き　・自由研究　・リコーダー
＜5年生＞・算数　・読書　・社会の宿題、調べ学習　・リコーダー・余りのでない割り算の宿題
＜6年生＞・社会のまとめ　・早寝早起き　・病気にならないこと・お母さんのお手伝い・朝ごはん作り

⑨　これまでで一番いやだった宿題はどんなものでしたか？

＜記述内容の結果＞

＜１年生＞・音読
＜２年生＞・算数　・国語
＜３年生＞・漢字をノートに書く　・算数プリント
＜４年生＞・漢字ノート　・日記　・音読　・手伝い　・読書感想文
＜５年生＞・なわとび　・腹筋　・自由研究　・読書感想文
＜６年生＞・社会のまとめ　・音読　・作文　・漢字２ページなど多い宿題

⑩　学校の宿題は、いつもどのようにしてやっていますか？

１．一人で。　２．友達と一緒に。　３．家族と一緒に。　４．塾の先生と一緒に。
５．その他の人と一緒に。（その人は誰ですか？　下のカッコに書いてください）

（　　）

⑪　担任の先生に、宿題について、もっとこうしてほしいと思うこと、こんな宿題があればいいのにな、といったリクエストがあれば、自由に書いてください。

＜記述内容の結果＞

＜１年生＞・もっと多く（難しく）してほしい
＜２年生＞・お手伝い　・生活・図工の宿題　・もっと難しくしてほしい
＜３年生＞・家族の似顔絵の宿題　・算数プリントを３枚にしてほしい　・体育の宿題・休憩
　　・図工の宿題　・もっと簡単で、少なくしてほしい
＜４年生＞・絵の宿題　・自主勉
＜５年生＞・もっと減らしてほしい　・プリントだけにしてほしい　・復習はしたくない
　　・運動系の宿題はやめてほしい
＜６年生＞・忘れ物をしない　・宿題が無い日があればいい　・宿題を減らしてほしい
　　・宿題は三日に一回にしてほしい　・面白く面倒くさくない宿題

⑫　できれば放課後や土日にどのように過ごしているのか教えてください。習い事（ピアノ、スイミングなど）やそのような予定がない日は、どのようにしているか教えてください。

月曜・・・ ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
火曜・・・ ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
水曜・・・ ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
木曜・・・ ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
金曜・・・ ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
土曜・・・ ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
日曜・・・ ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

ご協力ありがとうございました。

（夏の風物詩G作成）

教師へのアンケート及び抜粋結果

(表 3)

宿題に関するアンケート（担任の先生）

このアンケートは、最近の子どもたちと先生方の宿題に対する意識を理解するためのものです。大変お手数ですが、その状態をより詳しく知るために、担任の先生にもおたずねいたします。どうぞ、お気軽にお答えください。

1．自分の学級の子どもに対して出している宿題の量と内容についておたずねします。

① 普段（学期内の月曜日から金曜日）に出す宿題に要する時間的めやす、教科、内容などについて教えてください。

月曜・・・　　火曜・・・

水曜・・・　　木曜・・・

金曜・・・

② 長期休暇に出す宿題に要する時間的めやす、教科、内容などについて教えてください。

G.W. ・・・　　夏休み・・・

冬休み・・・　　春休み・・・

③ その他、年間を通じて、何か特別な宿題を出す機会を設けていることがあれば、教えてください（番号に○をつけてください）また、その内容も教えてください。

1．ある（内容：　　）　2．ない

2．宿題の量や内容の目的や決め方などについておたずねします。

① 日々の宿題の量や内容は、先生個人の判断で決められますか？あるいは、同学年のクラス担任間での量・内容についてのおよそのきまりや、学校側からの指示やルールなどがありますか？

1．先生個人の判断

2．およそのきまりやルールがある（内容：　　）

3．その他（　　）

同様に、長期休暇課題についても教えてください。

1．先生個人の判断

2．およそのきまりやルールがある

（内容：　　）

3．その他（　　）

② 宿題に対して、先生ご自身のお考え（目的や意義）、また子どものスケジュールに対する配慮などがあればご自由にお書きください

＜記述内容の結果＞

・「宿題」とは「非常に多目的で、様々なしつけや、社会教育の効果を持つもの」。
・勉学面では、授業と同程度の難易度で、量も適度にして、可能な範囲での定着度アップをはかる。
・家庭で毎日短時間でも机に向かって学習する「習慣づけのきっかけ」にさせる→学習に限らず日々何かを継続して行う忍耐力の育成に繋がる。
・家庭という場における総合学習の一環、家族とのコミュニケーションの手段の一つ。
・児童たちの状況に応じて、柔軟に量や内容の検討を重ねていくべきもの。
・宿題の出来具合を、成績に反映するのではなく、児童たちの習熟度の判断材料の一つとして活用する。

3．子どもたちが取り組んできた宿題への対応に関しておたずねします。

① 子どもたちがやってきた宿題は必ずチェックされますか？また、どのような方法でそれをされますか？

1．している（確認方法・返答：　　）

2．していない　3．その他（　　）

② 宿題の出来などを成績に考慮したり、今後の授業内容を決める上での参考にされますか？

1．している　2．していない　3．その他（　　）

③ 宿題をやってこない子どもに対してはどのような対応をとられるか、自由にお書きください。

うらにつづく

4．自分の出す宿題についての子どもや保護者の反応についておたずねします。

（この項目は、できればここ数年に限らず、これまでの教師経験をふりかえって過去から現在までの状況がどのように変わったかについても教えてください。）

① 子どもたちの宿題の提出状況や、達成状態はどうですか？

1．子どもたち全員が出す　2．ほとんどの子どもたちが出す　3．出してくれない子どもが多い

4．出してくれない　5．その他（　　）

過去：（　　）

現在：（　　）

② 宿題の量や内容・難易度は、子どもにとってどれくらいのレベルを考えて設定していますか？

量：1．多い　2．適度　3．少ない　4．その他（　　）

内容・難易度：1．難しい　2授業と同程度　3．易しい　4．その他（　　）

過去：（　　）

現在：（　　）

③ 宿題の量や内容・難易度は、子どもにはどのように受け止められていると感じていますか？また、宿題に関して子どもから何か言われたことはありますか？

量：1．多い　2．適度　3．少ない　4．その他（　　）

内容・難易度：1．難しい　2適度　3．易しい　4．その他（　　）

子どもから言われたこと：（　　）

④ これまでに、宿題の量や内容に関して、保護者側から賛同、あるいはクレームや要求がきたことはありますか？（複数回答可）

1．賛同があった　2．クレーム・要求があった　3．何もなかった

⑤これまでに、そういった子どもや保護者からの意見を元にして、先生ご自身の宿題に対するスタンスを再考または変更された経験はありますか？

1．ある

（内要　　）

2．ない

5．宿題に関して今感じておられる問題点、ご苦労、エピソードなどをお書きください。
また上地小学校は科学の授業に力を入れているとうかがいました。そのことに関するお考えなども自由にお書きください。

☆ 担任学級＜　年　組＞

☆ 教員歴　　年（現在受け持っている学年と同じ学年の担当は　　回目）

大変お手数ですが、質問1の参考にさせていただきたいので、1学期の時間割を添付していたければ幸いです。

ご協力どうもありがとうございました

（夏の風物詩G作成）

＜注＞

1）とはいえ，教育実践力の育成を主張する人々の影響を受け，教職教育学なる言葉は近年，多々用いられ市民権を得たようである。また，教職教育学なるタイトルの著作もいくつか著されている。しかし，それらも従来の教職研究のような著作との相違点も明確ではなく，未だ不明確な点は残されている。

2）このような授業スタイルを取ったのは，本授業の前の4限目に教育人間学の講義が設定されており，教職教育学の受講生の約6割が，連続して筆者の授業を受講しているという事情もある。

3）同校のウェッブサイトは，http://www.oklab.ed.jp/ueji である。参照されたい。

<謝辞>

本稿で取り上げた夏の風物詩Gのアンケート調査は，多くの方々の協力なしには実現し得なかった。多忙にもかかわらず，アンケートの実施をご快諾くださった愛知県岡崎市の上地小学校の川瀬哲夫校長をはじめ，学年主任の先生方やそのクラスの子どもたち，また同校を紹介してくださった鳴門教育大学の西村公孝教授，TA として絶えず学生をアシストしてくださった人間科学研究科博士後期課程の浅田昇平さん，そしてその指導教員である小野田正利教授，これらの方々のご協力によって意味ある探究機会が受講生に与えられたことを深謝したい。そして，宿題アンケートを実施した 15 班の夏の風物詩Gのメンバーにも，その意志力と努力に衷心より謝意を表したい。

Devotions to Teachers Work as Profession in a Lesson -Educational Sciences for Teaching in a Case Study of Group Work Research 'Teachers dealing with Homework'

YAMASAKI Yoko

In this paper I will try to propose the way of taking some findings toward teachers' identity and in this case there is a question how learning environment of practical activities is, through my lesson, *Educational Sciences for Teaching*, in Osaka University. I divided this lesson into two parts; in the first part 88 students were given theories concerning with history and practice of teachers in Japan and Britain and in the second part they themselves organized fifteen groups in some principles, different years and courses, and researched individual theme chosen in their discussions. The final purpose is the investigation through debates and researches in their groups on teacher's professional activities in the school. In their presentations, "Teachers dealing with Homework" by using questionnaire of 201 children and 6 class-teachers in Ueji Primary School, Aichi prefecture in Japan, very positive effects for approach to teachers' profession was especially shown.

As the result, the following points were made clear in order to take teachers' identity; a) the key issue is how to take attitudes as teachers into objective approach to educational phenomenon in the school, and b) how to take cooperated attitudes and abilities of communications with others for learning reality in practical lessons, c) in order to give opportunities for meaningful leanings, a new theme in the lessons to become teachers, which should reconstruct and reexamine whole curriculum in the course of becoming teachers, was noticed.